

令和4年度 信学会東堀保育園 「自己評価」関係者評価

1. 園の教育目標

園の中心テーマ「子どもたちの遊び、行事が実現される」こども園

サブテーマ「子どもが『考え、集い、より良い生活・行事をつくりだせる』園を目指して

・信学会の教育理念「子どもたちの主体的な学びと、他者との関わりで生まれる経験を通じて、生涯にわたり自ら学び続ける人間を育てる」

2. 本年度の重点目標

- ・思いやりをもって、「ひと・もの・こと」と関わり、友と伝え合う活動
- ・よく考え豊かに創造して表現し、自分らしさを発揮する活動
- ・生活と関わらせた、野菜などを育てていただく食育の活動

3. 自己評価 ※職員評価の実数で表記した 総数22名 ※赤字は本園独自の内容

A…十分達成されている

B…達成されている

C…取り組んでいるが、成果が十分でない

D…取り組みが不十分である

項目	自己評価内容	A	B	C	D
教育課程・指導	・信学会の新しい方針を理解し、進んで実践（ラーニングストーリー等）している。	12	8	2	
	・園は目指している教育目標、本年度の重点目標を周知している。	12	10		
	・教育課程実施に当たって、朝連絡を中心に教職員は共通理解し実践している。	10	11	1	
保健管理	・日常の健康観察や、疾病予防のための取り組みや健康診断などを行っている。	16	4	2	
	・コロナ感染対策を行い、日常の換気・消毒・感染リスクの低下を図っている。	18	3	1	
安全管理	・事故やケガ等発生時の危機管理マニュアルが整備されている。	13	8	1	
組織運営	・園長は教育目標の達成に向けリーダーシップを発揮し、職員をリードしている。	16	5	1	
	※特に、週案・月案へのねらい達成に向けた指導・助言を行っている。				
	・園運営が適切に機能するために、運営・責任体制の整備を行っている。	11	6	5	
	※特に、学年配置・係分担・合同保育等への体制づくりや改善を行っている。				
研修（資質向上への取組）	・法人実施の研修会への参加と、園内研修会の実施、	16	4	2	
	・日々の保育の振り返りと課題を明確にしている。※週案のねらい・実践・振り返り	11	10	1	
教育目標・園評価	・幼児の実態、保護者の意見要望などを踏まえた園目標を設定している。	13	9		
	・保護者アンケートの実施と、学校関係者委員会（モニター会）を設置している。	13	9		
	※行事・生活発表会での「保護者アンケート」の実施を行い改善を図ろうとする。				
	・本年度の重点目標達成のための取り組みをしている。	11	8	2	
情報提供	・園公開を実施し、園の取り組みを広く情報提供している。	4	16	2	
	・園の情報を広く公開するために、ホームページ等を活用している。	20	1	1	
	・レーザーキッズを通して、園児の把握や情報発信等を積極的に行っている。				
保護者・地域住民との連携	・PTA や学校関係者委員会（モニター会）等で定期的に懇談会を実施している。	15	6	1	
子育て支援・預かり保育	・地域における保護者の実情や、子育て支援ニーズを把握している。	2	13	6	
	・保護者の実情や要望を取り入れ、預かり保育・希望保育事業を実施している。	13	8	1	
教育整備環境	・子どもの成長に則した教育環境になるよう工夫を重ねている。	12	7	3	
	特に、未満の部屋環境 以上児の活動が生きる環境 園全体の各コーナー環境等				

4. 本年度の取り組みについて

- ・5年目となって園テーマを「子どもたちの遊び・行事が実現されるこども園」とした。また、具体的に実現するためのサブテーマを設け、「子どもが考え、集い、より良い生活・行事をつくらせる園」とした。これは、日々の保育で「子どもの主体性を実現するための願う姿」と考えた。早速、各年齢別に応じて、子どもが考える場面の工夫が進み、クラス活動「運動会」等での話し合いが進み、子どもの課題別種目を創出した結果、保護者

から「家で園の話をよくする」「自分で色々なことをしたり、挑戦するようになった」と評価をいただいた。また、本園の特色ある企画の「わくわくの日」は、園児や保護者にとって魅力あり楽しい取組として高い評価を受けている。英語や体育の専科授業も含め、概ねより良い園の運営になってきている。

- 本年度新たに、「公認心理師の中澤晃先生」との提携をして、配慮を要する子どもへの支援やそれに関わる保育士の相談・保育の具体的な支援を行った。その結果、多くの保育者から「勉強になった」「具体的な支援方法が分かった」「実際に行って効果があった」等の意見が多く出された。年間10回ほどの園訪問を通して、午前中は、「以上児の対象園児参観・相談・具体的支援相談」。午後は、「園児理解と心理学的な支援方法」「人間関係づくり」等の研修を行い、保育の質の向上を図った。しかし、全職員が一堂に研修を受けることができないので、経験年数3年目以上を中心としたが、職員の経験による理解の違いや差が生まれ大きな課題となった。今後改善を図りたい。
- コロナ禍の園運営に工夫改善が求められている。保護者からの要望もあり行事の見直しを図った。具体的には参観日を学年別の分散型とし「クラス別、短時間で園の保育のよさを感じられるもの」、卒園式も「クラス別として、感染リスク低下」を図って行った。保護者からの意見要望を今後も園運営に生かしていきたい。
- 「ラーニングストーリー（園児理解）」の取組も、以上児では、月に一度のペースで保護者に提示し、保護者からの返事も積み重なってきている。「毎月のきずなが、楽しみ」「きずなに、家でのエピソードを増やして、子どもの思い出作りをしている」と新たな取組が広がってきている。
- 本年度は、特別支援教育への取組を推進した。特に、発達障がいを含む「困り感をもつ子ども」やその保護者への支援を行ってきた。具体的には、「公認心理師中澤晃先生」の支援と市の子ども総合相談センターの専門員からのアドバイスを受け、支援の方法や改善の試みを行った。大きな効果が出ている。
- サブテーマ「子どもが考え、集い、より良い生活・行事を行える」は、クラスの活動及び運動会や発表会（音楽会）等で行った。特に、以上児の運動会では、子どもが日頃の新型コロナ感染防止の関係で、「密集を避けた、短時間・学年ごと」の行事とした。その結果、短時間の集中度が高まり、「子どもが考えた種目や内容」となった。この内容の改善もあって、保護者からの評価は、「感動した」「短時間でも子どもの姿が分かりやすかった」と好評であった。今後も今回の方式を採用し、行事のあり方全体の見直しをしたい。
- 食育に関わっては、園の畑「にじいろ畑」で、16種類の野菜等を栽培し、それ以外に、園の近くの畑を借用して、「おひさまファーム（地域の農業団体）」と連携し園児全員が関わっての取組となった。職員や地域の支援者からの日常的な管理が行き届き、品質も量も十分確保され、園児の観察→試食や収穫野菜で給食も行われて、「大切に育てていただく」を実感し始めている、この取組と体験を今後も続け、日常生活と関連付けた食育をさらに推進したい。
- 課題は、地域における保護者の実情や、子育てニーズに応じた園運営である。新型コロナ感染防止の関係から、「ノントンの日」の実施が難しく、人数を制限しての運営をした。当面、新型コロナウイルス感染防止対策を行いながらの実施となるので、ホームページ等のネットを活用した発信や交流を図りたい。

5. 来年度の取り組みについて

- 5年間の運営を通し、新たな取り組みとして「公認心理師中澤晃先生の園支援」「子どもが主役の行事や活動」等が保護者の口コミで広がりを見せている。特に、中澤先生が配慮を要する子どもの理解について具体的に教えて頂いた点は、保育者にとって保育の質をあげたと言える。配慮を要する子どもの全てに対して行っているのではないので、今後の課題である。また、保護者との関係は、年長児を中心に行った。特に、発達障がいを含む子どもの困り感に立った相談では、「小学校進学を考えた就学支援へとつながった」この事は大きな成果であり、該当保護者からも「早く相談できて良かった」と感想をいただいている。今後も、配慮を要する子どもの困り感に立った園児理解や保育の向上を目指したい。
- 令和4年度に大きな課題となっているのは、「保護者・地域の子育て支援」である。コロナ禍にあつて場を設けていく難しさがあるが、今後ウィズコロナの流れもあるので、可能な限り「新たな子育て支援事業」を立ち上げて少しずつでも参加者を増やしていく努力が必要であると考えている。
- そのため、保護者や地域の子育て世代にとって、魅力ある企画やアイデアを創出し、「子育て支援」とともに行っていく必要を感じる。また、地域の関係団との連携も必要である。来年度はこの点を積極的に行っていく。